

## ピアノ教育研究会の活動報告

仁愛女子短期大学 准教授 中野 研也

ピアノ教育研究会の平成22年度における活動についてご報告いたします。

同研究会主催による活動として、一昨年度と同じく2つの公開講座と1つの演奏会が行われました。順を追ってご紹介させていただきます。

### ○6月28日（月）

片山恵莉・中村はるな ピアノジョイントリサイタル  
仁愛女子短期大学音楽館 4階ホールにて  
参加者：音楽学科学生43名、一般15名

#### 〈プログラム〉

- ・リスト：コンソレーション（慰め）より第1、2、3番
- ・リスト：リゴレット・パラフレーズ
- ・ドビュッシー：前奏曲集より  
アナカプリの丘  
西風の見たもの  
亜麻色の髪の乙女  
途絶えたセレナード  
妖精はよい踊り子  
ヒースの茂る丘  
水の精  
交替する3度

ディティユー：ピアノ・ソナタより第3楽章  
“コラルと変奏”

近年の専攻科音楽専攻修了生による、ピアノリサイタルです。

出演して下さったお二方ともに、福井県音楽コンクールで知事賞を受賞されるなど、たいへん優れた才能の持ち主であり、その演奏をほんの間近で聴かせて頂ける素晴らしい機会となりました。大きな演奏会場との違いは、

やはり演奏者の息遣いや、音色の変化などが、ダイレクトに伝わってくる事でしょう。

リスト、ドビュッシー、ディティユーともに、ピアノという楽器を大変美しく響かすことのできる作品であり、また今回出演のお二人は、美しい音色を身の上としたピアニストでもあります。学生にとっては身近な先輩でもあり、そんなお二人の演奏から受ける刺激は、また格別のものがあつたのではないのでしょうか。

### ○7月25日（日）

#### 土田英介ピアノ公開講座

仁愛女子短期大学音楽館 4階ホールにて  
参加者：音楽学科学生42名、一般60名



作曲家兼ピアニストで、本学専攻科音楽専攻でも教鞭を取られる土田英介先生を講師として招聘し、公開レッスンが行われました。

毎年この時期は、福井県音楽コンクールの課題曲に取り組んでいる方が多いため、その課題曲による公開レッスンを行っております。今回も第62回福井県音楽コンクール課題曲より小・中学生部門の曲を取り上げました。

受講のモデル生は本学専攻科でピアノを専攻する学生が行います。日頃は、大人のための高度な曲ばかり勉強しているため、子供のための作品に触れる機会がありませんと思われるかもしれませんが、かつて自分たちも小さい頃に習ったような曲を、大きくなってから弾くということは、また何か、学生達にとっても新たな発見があつたのではないのでしょうか。

では、内容の紹介に移ります。

〈公開講座プログラム〉

～午前の部～

1. バッハ：マーチ 変ホ長調
2. クーラウ：ソナチネ ハ長調 より第1楽章
3. グルリット：明るい空 ハ長調
4. バッハ：ポロネーズ ト短調
5. クーラウ：ソナチネ ハ長調 より第1楽章
6. カバレフスキー：ロシア民謡の主題による変奏曲  
ヘ長調 Op.51-1

7. スカルラッチィ：ソナタ イ短調

～午後の部～

8. ハイドン：ソナタ ニ長調Hob.XVI-37
9. カバレフスキー：ソナチネ 第1番 ハ長調  
より第1楽章
10. J.S. バッハ：二声インヴェンション 第5番  
変ホ長調
11. J.S. バッハ：三声シンフォニア 第4番 ニ短調
12. モーツァルト：ソナタ ヘ長調 より第1楽章
13. ショパン：ワルツ 口短調

シンプルな楽曲の演奏は、内容が複雑で高い技術の要求されるような作品を演奏する事とは、また違った難しさがあります。単純な曲ほど、音楽そのものの質が問われるからなのですが、その点を作曲家でもある土田先生は、作品それぞれの持つ特徴をとらえ、また演奏表現におけるポイントを的確に指摘されます。何となくの感覚で弾くのと、論理的な裏付けを伴って演奏するのでは、弾いている本人はもちろんですが、聴く側にとっても説得力が大きく違ってきます。

コンクールに参加する子供たち、その指導者の方々、また御父兄の皆様のみならず、将来自分が教える立場になる本学学生にとっても、またとない機会だったのでないでしょうか。

○11月1日（月）

ナードル・ジョルジュ ピアノ公開講座

仁愛女子短期大学音楽館4階ホールにて

参加者：音楽学科学生40名、一般25名



ハンガリー・リスト音楽院は、パリ音楽院、ザルツブルグ・モーツァルテウム、モスクワ音楽院、ジュリアード音楽院とともに世界五大音楽院の一つに数えられていますが、そのリスト音楽院のピアノ科教授であるジョルジュ・ナードル先生は、これまでに数多くの優秀な教え子を世の中に送り出しています。

音楽学科では、これまでに数多くの優秀な教え子を世の中に送り出しています。

音楽学科では、これまで20年以上にわたり、そのジョルジュ・ナードル先生を仁愛女子短期大学音楽学科特別講師として毎年お迎えしており、ピアノ教育研究会共催と共催で、ピアノの公開講座・公開レッスンを開催しています。

公開レッスンで直接指導を受けるモデル生は、音楽学科および専攻科音楽専攻のピアノ学生の中でも特に能力が優れた学生です。ハンガリー人はとても情熱的なキャラクターが特徴ですが、ナードル先生の音楽とその指導における情熱は、圧倒的なものがあります。それと同時に知性、論理性を忘れないナードル先生と、向学心溢れる学生との間の高い緊張感を伴ったレッスンを毎年のように聴講することができるのは、大変幸せな事だと思います。

今回とりあげた曲は、以下の2曲です。

- ・シューマン：ノヴェレッテ第8番 Op.21-8
- ・ラヴェル：水の戯れ

シューマンはナードル先生がいちばん愛している作曲家の一人であり、シューマンの音楽の特徴である「フロレスタン（激しさ、情熱の象徴）」と「オイゼビウス

(知性、穏やかさの象徴)」との対比をいかに音楽的に表現するか、ときに実演を交え、床を踏みならして呼吸の間を伝えるなど、有無を言わずに生徒を引っ張っていく姿が印象的でした。

「自分はペダルマニアだ」と先生は以前おっしゃっていました。ピアノをピアノたり得るものとするのは、サステインペダルの存在です。少々専門的になってしましますが、音を切らずに伸ばすというこのペダルにより、

ピアノという楽器は音を幾層にも重ねて行くことができます。この機能をいかに賢く、最大限に用いるかということ、ナードル先生はいつも研究していらっしゃいます。ペダルの使用を前提とした鍵盤のタッチとペダルによってどこまで音を重ねてゆくか、それに対する耳の判断。普段何気なくやっていることをもういちど考え直す、よい機会になったことと思います。

(中野研也 筆)



ハンガリー国立リスト音楽院